

仕事の刺激物足りず

広島県内の社会人が抱く街の印象と、若者を中心とする転出超過にどんな関わりがあるのか。人口流出問題を研究する県立叡啓大（広島市中区）の早田吉伸教授に聞いた。

（余村泰樹）

可もなく不可もなく。住みやすいが刺激を求める若者には物足りない。「ほどほど」は、そんな広島の街を象徴する言葉なのでしょう。

若者が転出する一番の要因は仕事です。今の若者は経済の停滞や震災を経験し、自己の成長や社会的意義を感じられる仕事を求めている。それが広島には少ない。交流サイト（SNS）では同級生の活躍も目の当たりにする。常に自

叡啓大の早田教授に聞く

分をバージョンアップしないと足りない危機感があります。

広島企業の企業を見ると、給与が良くても自分の成長をイメージできず「10年間塩漬けされたら先がない」と、優秀な人ほど転職している。製造業を中心に産業がしつかりしていた分、企業が変わっていません。

教育県であることも、一因かもしれません。イノベティブで優秀な人材が育つ。でも能力を生かせる企業が少ないから、外に出てしまふ。転出＝悪ではないですが、古里に戻りたいのに戻れないのは致命傷です。

過疎や農業の問題など、社会課題の解決につながるような仕事に企業が力を入れれば、チャレンジしたい若手を引きつけられるでしょう。



語る早田教授

「若者は自分が成長できる仕事を求めている」と